

今日という日の記憶があれば、この先もずっと生きていけると思った。
いつか、リヴァイ兵長が花を買いに来なくなっても。

調査兵団が第三回壁外調査を終えたらしい。いつものように、ファイガロの酒場に花を届けた帰り、エイミーは街の掲示板の前へ駆け寄った。

『兵士三五名が死亡、大きな成果は無し』

号外に書かれた大見出しの下の細かい文章を、エイミーは一文字も逃さず読んだ。大きな成果がないなどと揶揄するような見出しだが、ウォールマリア内への拠点づくりは少しずつ進んでいるらしい。けれどもエイミーが今知りたいのは、そういう情報ではない。

フツと息を吸ったのち、目をカッと開いて今回の調査での死亡者リストに目を通す。

思った通り、彼の名前はなかった。

良かった——。ホッと胸を撫でおろす。安堵と同時に、期待が押し寄せる。そろそろだ。

次の瞬間、今後は自責の念がよぎる。人が三五名も亡くなっているのだ——壁の中に住む人々の、平和と安寧を守るために。

エイミーが思いを馳せているうちに、だいぶ多くの人が集まっていたらしい。自分が掲示板の前を陣取っていることに気づき、エイミーは周辺に頭を下げながらその場を退いた。

夕暮れ時、店の前には遊びから帰宅しようとする子どもたちや、買い物帰りの主婦が通りかかる。飲んだくれてばかりの駐屯兵団が仕事を終え、覚束ない足でフラフラと通り過ぎるのもこの頃だ。

やがて、メラメラと燃えるような赤い夕陽が、壁の向こうに沈んでいく。特筆することもない、いつもの光景だ。それなのに、いつもより綺麗に見えるのは冬の澄んだ空気のせいかな。

その日は、閉店時間を過ぎててもっさりだけ店を開けておいた。

三軒先の葉屋の角に、濃緑のマントが見えた——ような気がした。心臓が弾む。これだから自分の勘の良さが時々怖い。エイミーは急いで、店先に出したバケツの一つを両手で持ち上げると、外に背中を向けるようにして店に入った。水の入ったバケツは重い。床に置き、水に差してある白いユリが折れてしまっていないかを軽く点検する。動作に反して、心臓は早鐘を打っていた。

すると、背後に人が立ったのを感じた。

「まだやっているか」

声がする。

振り返る——予想通り。

そこには、調査兵団のリヴァイ兵長が立っていた。

「はっ……ハイ、やっています」

久しぶりに発した声は想像したよりずっと小さかった。聞こえていないかもしれない。補足するかのよう、エイミーは首を縦に振った。

「閉めようとしているところにすまない。また、供花をお願いしたいんだが」

「かしこまりました」

今度は、きちんと声が出た。

壁外調査が終わるたび、リヴァイ兵長は店にやってきた。前回は、まだ少し暑さの残る秋の始まりだったと記憶している。あれは、冬を越す前の最後の壁外調査だったのだろう。久しぶりに会ったリヴァイ兵長は、見た目も、体格も、淡々とした口調も、何一つ変わらなかった。彼は淡々とした口調で、供花は入団二年目の若い男性兵士と、その母親に向けたものだと言った。

どこに向かうのか知らないが、今から出かけるのならそれほど遠くではないだろう。そう遠くないどこかに、息子を失った母親がいるのだ。白いユリをベースに作り上げた花束に、淡い桃色のカーネーションを数本入れて花束を作っている。

エイミーが花束を作る時、リヴァイ兵長は決まってその作業をじっと見ていた。一般的な客は、店内の花を眺めたり、ちよつとした世間話をしたりして時間をやり過ごす。いっそ話しかけてくれた

ら楽なの……。彼は黙ってエイミーの手つきを見ているのだ。その鋭い視線で、監視するかのよう。

その瞬間、エイミーはいつも緊張してしまう。水仕事で荒れている手は、あまり見られたいものではない。変な汗をかいているのではないか。見られているという羞恥心と、リヴァイ兵長が横に立っているという緊張から、茎の部分を結ぶ紐がうまく結べない。

焦る。焦れば焦るほど、指が滑ってしまう。

すると横に立っていたリヴァイ兵長がエイミーほうに一步近づき、花束のちょうど中腹に当たる部分を持ち上げた。

エイミーは思わず顔を上げた。

どういうこと？ 持っていてやるから、その間に紐で結わけてこと？ ごく自然にエイミーが顔を見上げると、リヴァイ兵長と露骨に目が合った。心臓が跳ねる。彼は涼しい顔をして言った。

「持っている。ゆっくりでいい」

ゆっくりでいい？ エイミーは混乱した。そんな優しい言葉を掛けるような人だったのか――。

作業をしながら、チラリと横顔を盗み見る。熟練の兵士とは思えないような白い肌。グレーのような、ブルーのような綺麗な瞳。射貫くような鋭い視線――が、至近距離にあった。エイミーは、余計にどうしていいかわからなくなった。紐を持ち直し、震える手をどうにか抑えながら方結びをしていく。すると目の前の男は、珍しくエイミーに話しかけてきた。

「一人で店をやっているのか」

「え？」紐がうまく結べた瞬間、思わぬ質問がきた。緊張しながら、エイミーは早口になって答えた。「いえ、母と二人でやっているんです。最近は母の体調があまり良くなって……一人で店を開けていることも多いですが」

そうなのか、と兵長は言った。考え込むような表情で「それは心配だろう」と続けた。

エイミーはこくりと頷いた。

思ったより優しい。心臓の鼓動が早くなる。これ以上自分の話を続けるのは緊張してしまう。思わず話題を逸らしたくなった。

「あの、」エイミーは、思い切って質問をしてみることにした。「私も一つ聞いてもいいですか」

「なんだ」

リヴァイ兵長は顔色を変えずに頷いた。

「亡くなった兵士さんのご家族にお花を持っていくのは、兵団のしきたりなのですか？」エイミーは言葉を続ける。「その、なんというか……あなたしか来ることがないから気になって」

ここが、調査兵団本部から少し離れているせいもあるだろう。弔問の前に供花を購入しに来るのは、リヴァイ兵長ただ一人だった。

「いや」彼は小さく首を横に振った。「俺が勝手にやっているだけだ」「そうなんですか？」

そんな気がしていたが、明言されるとやはり驚いてしまう。壁外調査で亡くなる兵士の数は多い。一人ひとりに思いを馳せることなどできないだろう——。エイミーは黙ってリヴァイ兵長を見つめた。その視線に應えるように、彼は口を開いた。

「生まれた場所が治安の悪いところだった。毎日のように誰かが死んでいた。飢餓だとか、犯罪だとか、いろんな要因でな」

リヴァイ兵長は、ミットラスの地下街出身だと新聞か何かで読んだことがある。

エイミーは黙って頷いた。

「身近な人間が死んだとて、金はないし、大した埋葬はできない。土に還すだけなんだが——そこに、母親は白い花を供えていた。幼い頃の記憶だが、なんとなくそれを覚えてる」

「……」

「なのに、母親が死んだときは花を供えることができなかった。まだ四つの子だったからな」

そう言う、リヴァイ兵長はエイミーが持っている供花をひよいと持ち上げた。

「まあ、俺なりの供養のつもりだ。何か意味があるわけじゃない。花を持っていたところで、家族の心が救われるわけでもないだろう」

何か言いたいのに、うまく言葉がでない。エイミーに考える隙を与えることなく、彼は言葉を続けた。

「すまない。つまらない話をした」

「ううん、そんなことないです」

「そうか」

「……それに、救われると思います」

「？」

「家族は救われると思います。少なくとも、死んだ時に思いを馳せてくれる仲間がいたってこと」

エイミーが思い切って言うのと、リヴァイ兵長は少しだけ驚いたような表情を見せた気がした。

「いつもすまないな」

「え？」

「閉店の時間をとくに過ぎているだろう。訓練を終えてから来ると、どうしても遅くなってしまう」

エイミーは首を横に振った。

「いえいえ、全然大丈夫です！」エイミーはニコツとしたつもりだったが、頬が引きつってうまく笑えた気がしない。「お忙しいでしょうから」

できあがった花束を渡し、金額を伝える。お金をもらったら終わりだ。何ヶ月も待ったというのに、店で過ごす時間はあつという間だ。でも今日は、初めて話ができた――。ノロノロとお釣りを渡したい気持ちを押さえ、テキパキと小銭を渡す。

「ありがとうございます」

「申し訳ないついでに相談なのだが、明日の夕方も来ていいか？ 今日と同じくらいの時間に」

「え？」

「明日も一件回る予定がある」リヴァイ兵長は少し逡巡するような表情をしたのち、「礼はする」と付け加えた。

明日も来るなんて！ エイミーの気持ちは、パツと明るくなった。表情に出ないように早口で言った。

「じゃあ、準備して待っていますね」

翌日、夕陽が壁の向こうに沈むくらいの時間にリヴァイ兵長はやってきた。昨日と同じような鋭い目つきで、昨日と同じようにエイミーの作業を見つめている。

けれども、昨日の会話のせいか、不思議と監視しているように思えなかった。もう、怖い人には思えなかったのだ。

花束を渡し、金額を伝え、お釣りを渡す。一連の作業は順調に進み、ものの一〇分でお別れの時間だ。

これでまた、数ヶ月は会えないのだ。いや、でも会えないほうがいいのだ。供花など買いに来ない方がいいに決まっている。

「礼をすると言ったな。今日も遅くなってしまった」
「え？」

「何か必要なものはあるか？ いつも世話になっている礼だ」
「必要なもの？ エイミーは考えを巡らせた。」

表の看板のベンキが剥がれている。鉄もだいぶ古くなり、錆びてきてしまった。

いや、そんな物よりも。

できることなら、またすぐにリヴァイ兵長に会いたい――。

エイミーは時々、考えるより先に行動に出してしまうところがある。
この時も、気がついたら声が出ていた。

「そうしたら、兵長とデートしたいです！」

エイミーはハツとした。何を言っているのだろうか、私は。

顔が赤くなっているのは、鏡を見なくてもわかる。恥ずかしい。

耐えられない。沈黙に耐えられないから早く何か言って欲しい。ああ、やっぱり何も言って欲しくない。たかが、花屋の娘として何度か会話をした程度の間柄なのに、何を言っているのか。呆れられたに決まっている――。いっそ冗談にしておもうか。

すみません、冗談です！ そう言おうとした時だった。

「ああ。わかった」

「え？」

「了解した」

リヴァイ兵長は真顔で言った。

ええええ!? 了解した？

お釣りを持ったまま、エイミーはその場で呆然とした。

「なぜ驚いた顔をしている」

「いえ、だって、了解されると思わなかったのです……」

「行きたいところはあるのか」

「えっ、行きたいところ、ですか!？」

「ああ」

それはそうだ。デートを提案したからには、行き先が必要だ。

「店があるので、町からあまり出たことがなくて……」 エイミーは恐る恐る言葉を続けた。リヴァイ兵長は真顔のまま。「少し、遠くの街を歩いてみたいです」

「了解だ。考えておく」

日取りを決め、リヴァイ兵長は颯爽と店を出て行った。緊張するので半年先でも良いくらいだったが、三日後の定休日に出かけることとなった。

大慌てで店を閉め、エイミーはダッシュで自分の部屋に戻ると床に座り込んだ。

デート。胸が張り裂けそうだ。

どうしよう。何を話そう、どんな顔で行けばいいのか。そうだ、何を着て行けば——!?

本当は服を買いに行きたいところだが、そんな時間も予算もない。諦めて、クロゼットの奥から一張羅を引っ張り出す。成人を祝うパーティーの時に着た白いワンピース。数年ぶりに着て、鏡の前を一周してみる。体型が変わっていなくてよかった。なかなか良い感じかもしれない。

いやいやいや、待てよ。調査兵団の幹部なんだから、きつと華やかなパーティーにも出席もしているはずだ。綺麗な女性なんて見慣れているに違いない。

それに——。それに、私とのデートに迷わず快諾するくらいだ。女の人と遊ぶのにすぐ慣れているのかもしれない。揶揄われてるのかもしれない。エイミーは急に悲観的な気持ちになった。

約束の日は、リヴァイ兵長が店の前まで来てくれることになった。いた。

エイミーは、言われていたより一時間も早く、準備を終えてしまった。落ち着かないあまりに、靴を履いたり脱いだり、店内の椅子に座ったり立ったりを繰り返す。

すると、おおよそ二〇分後、店の扉が勢いよく開き、リヴァイ兵長が現れた。エイミーは飛び上がってしまった。約束の時間まで、まだだいたいあるというのに。

「ここここ、こんにちは」

声は上擦り、少しよろけてしまう。それを見て、リヴァイ兵長は可笑しそうに笑った。ちゃんと笑った顔を見たのは初めてかもしれない——。そして、今日は兵団着ではないらしい。白いシャツに黒のジャケット、グレーのスラックスを履いていて、いつもとは全然違う雰囲気だ。

エイミーの心臓は高速で波打った。

そんな急に現れて、笑ったりしないで欲しい。

「随分と準備が早いな」

リヴァイ兵長こそ、と言いかけて口をつぐむ。改めて名前を呼ぶのはなんだか恥ずかしい。第一、私は兵士ではないし役職で呼ぶのも変ではないか。

すると、エイミーの心を読んだのか、彼は言った。

「リヴァイでいい」

そんな、呼び捨てなどできない。

「じゃあ、リヴァイ……さん」

「好きに呼んだらいい」

「……」

「そちらは」

「え？」

「名前はなんという」

そうか。リヴァイ兵長は有名人だから勿論知っていたけど、私は名乗ってすらいなかったんだ。

「エイミーです」

今更の自己紹介はなんだか恥ずかしくなって、小さな声になってしまった。リヴァイ兵長は、エイミーか、と口の中で反芻するように繰り返した後、早速名前を呼んだ。

「エイミー、少し歩けるか」

「はい、もちろん！」

威勢よく返事をする。リヴァイ兵長は機嫌が良さそうだった。

少し歩いて馬車に乗り、一〇分ほど揺られる。リヴァイが連れてきたのは、隣街だった。街の中心地に大きな川が流れ、川沿いを中心に栄えている街だ。エイミーの住む町よりずっと都会的で、ワクワクする。たかが隣の街に來たというだけなのに、心が弾む。

露店が立ち並ぶエリアがあった。雑貨を売る店、靴下や帽子などの衣料品を売る店、フルーツやパンを売る店など。エイミーの家の近くにもマーケットがあるが、こんなに多くの露店は出ていない。

二人は、露店を冷かしながら歩いた。

エイミーは、リヴァイに調査兵团についてたくさん質問をした。聞きたいことが山ほどあったからだ。

例えば。

「調査兵团の皆さんは、普段どんな食事をしているんですか？」

「別に普通だ。茶色いパンに、豆のスープに、調子のいいときは卵かチーズが付くくらいだな」

「それだけ!」エイミーは驚いた。「兵士なんだから、力をつけないといけないのに」

「税金で食わせてもらってるのに文句は言えねえだろ」

「そうなんだ……」

華やかそうに見えて、調査兵团も大変なんだなとエイミーは思った。そういえば、資金繰りが大変だと風の噂で聞いたことがある。

「豆のスープに、肉が追加されるときもあるぞ」

「どんな時ですか？」

「団長の誕生日だ」リヴァイは悪戯っぽい顔をして言った。「エリーゼっていう、食堂を取り仕切っているおばちゃんがいるんだが。彼女はヤツに惚れてる」

リヴァイ兵長は、思っていたよりもずっと話しやすい人物だった。最初こそ緊張していたものの、エイミーが「足が痛くなっちゃった」と言えば「おんぶしてやろうか」と冗談で返したりする。意外とお茶目なのだ。エイミーは楽しくなり、ついお喋りになってしまった。

気づけば、酒屋をやっている幼馴染のことまで話していた。

「フィガロはおホなんです」

「ほう」

「酒場をやっているのに計算ができないし。こないだだって二千リラのガーベラを一〇本買ったのに、二万リラも払ってきたの」

なんと、アホのフィガロはゼロの数一つ間違えたのだ。

「それでその金はどうしたんだ？」

「計算を間違えるのが悪いんだから、そのまま貰ってしまおうと思ったけど……さすがに気が引けて、こっそりフィガロの酒場に置いてきました。一八〇〇〇リラのお釣りを」エイミーはあの日のことを思い出し、興奮しながら言った。「やっぱり貰っちゃえば良かったかなあ」

リヴァイはフツと笑った。

「いいんじゃないか。お前は悪いことできないだろ」

お前？ 今お前って言った？ エイミーはドキツとした。

フィガロに「お前」なんて言われた時には、平手打ちを食らわせてしまふけれど。リヴァイ兵長に呼ばれると、むしろ嬉しく感じてしまう。だからそのあとの台詞を聞いて、ハチャメチャに後悔した。フィガロの話なんてしなければ良かった。

「随分と仲がいいんだな、その男と」

「ただの幼馴染です！」

雑貨を置いている露店の一つに、キラリと光るガラスの花瓶が見えた。

「わあ、綺麗」

エイミーは思わず露店に駆け寄った。ガラスで作られた透明の花瓶が、太陽の光を受けてキラキラと輝いている。

「これは何に使うんだ？」

「花瓶ですよ！」エイミーは花瓶をそっと手に取ると、左右に回転させて煌きを楽しんだ。

「こんなにお花を飾ったら素敵……」

うっとりとしていられたのも束の間だった。花瓶の裏側に貼られているシールを見て、エイミーは驚愕した。やっぱりフィガロに一八〇〇〇リラを貰っておくべきだったか……。花瓶を左右に揺らし、もう少しだけ煌きを楽しんだあと、ゆっくりと棚に戻す。名残惜しいが仕方ない。

「気に入ったんじゃないか」

「はい」

「買わないのか」

「うーん、でもすごく高価なもので」

エイミーが答えると、リヴァイ兵長はゆっくりと花瓶を手に取り、先程エイミーがやったように左右に回転させた。

「確かに綺麗な。店の窓辺に置いたら映えるだろう」

男の人でもそんな感性があるのか、とエイミーは嬉しくなった。

フィガロだったら、「そんなガラスなんかより、一緒に肉でも食べようぜ」って言いそう。まあ、それがあいつのいいところでもあるんだけど……って、今はフィガロのことなんてどうでもいい！ エイミーは空中に向かって手を振りまわし、余計な残像を追い払った。リヴァイは不思議そうにエイミーを見たのち、露店の店主に向かって言った。

「これを貰えるか」

「えっ!？」

エイミーは今日一番の大声を出した。「ダメですよ！ こんな高いもの」

「礼をすると言っただろう」

「でも」

言いかけて遮られる。どうしよう。

「気にするな。俺が贈りたいだけだ」

「ありがとうございます。大事にします」

花瓶の入った花瓶を抱きしめたまま、エイミーは丁寧に頭を下げた。その時、リヴァイ兵長が一瞬だけ笑ったような気がした。いつ

ものような、少しだけ口角をあげる表情ではなく、普通に笑った気がしたのだ。

「えっ、今、笑いましたか？」

「あ？」

「珍しいなと思って……」

「俺は結構笑う」

二人で話していると、周りの人たちにジロジロと見られているのに気がついた。それはそうだ。エイミーはハツとした。調査兵団のリヴァイ兵長といえば、壁内の超有名人だ。たかが花屋の娘と、こんなに白昼堂々とデートをしているのはまずいのではないか。

するとエイミーの考えを察したのか、リヴァイは言った。

「構わん。好きに言わせておけばいい」

昼時になり、リヴァイ兵長は「どこか店に入るか」とエイミーに聞いた。エイミーは少し考えたのち、天気が良いから外でお昼を食べたいと提案した。二人は、露店でハムの挟まったバゲットとフルーツを買い、外で食べることにした。

平日の昼間だからだろうか、あまり人は多くない。二人はしばらく川沿いを歩いていたが、リヴァイが「適当に座るか」と言ったのをきっかけに石段に腰を下ろす。

リヴァイは首につけていた白いクラバッドを右手でサツと外すと、石段の上に敷いた。

「ほら」

「え？」

「そのまま座ると服が汚れるだろうが」

リヴァアイはそう言うのと、白いクラパッドを敷いたすぐ左隣りにドカッと腰を下ろした。エイミーは胸がいっぱいになって言葉がうまく出なかったが、頭を下げて一礼したのちにゆっくりと座った。

厚切りのハムの挟まったバゲットは、塩味が効いていてとてもおいしかった。「おいしいですね」とエイミーが言うと、リヴァアイは「俺の分も食うか？」と食べかけのバゲットを差し出してきた。冗談なのか本気なのかわからず、「そんなに食べられないですよ」と返すと、リヴァアイは「そうか」と言つて、自分のほうに戻した。少しがっかりした様子だったから、もしかしたら本気で全部くれようとしていたのかもしれない。エイミーはそれがなぜ可笑しくつて、フフフと笑った。

「なにがおかしい」

「なんにも」

「笑つてるだろうが」

「笑つてないですよ」

エイミーは笑いながら、左隣の男を見る初めて会った時と同じく、肌が白いいという印象を持つ。まっすぐな黒髪はサラサラで、この人は本当に自分より年上なのだろうか、とエイミーは思った。

キラキラと水面が反射する。一〇メートルほどある川幅の向こう岸には、小さな子どもたちが駆け回っているのが見える。

お天気の定休日。のどかな川沿いで食べるバゲットがおいしい。幸福な時間だ。

店で働いている瞬間も好きだし、フィガロや他の友だちと遊んでいる瞬間も好きだけれど——今、こんなに穏やかで幸せな気持ちになるのはなぜだろうと思った。

この瞬間、エイミーは自覚してしまった。
リヴァアイ兵長のことがたまらなく好きだと。

顔が赤くなっていないだろうか。さっきまで饒舌に話していたのに、なんだか急に恥ずかしい。

エイミーは黙ってバゲットを食べ進めた。

気づくと、リヴァアイは食事を終えていたらしい。露店で一緒に買ったオレンジの皮を剥いている。指先で器用に、丁寧に。

エイミーがバケットを食べ終わった頃、リヴァアイは器用に皮を剥いたオレンジを差し出し、「ほら」と言った。

心臓が跳ねる。お礼を言い、渡されたオレンジを口に放り込む。思ったよりもずつと甘い。

「甘くておいしい」

「そいつは良かった」

リヴァイはフツと笑った。この時も、考えるより先に言葉が出た。

「リヴァイ兵長はお優しいですね」

「あ？」

リヴァイがエイミーのほうを向く。

「はい。クラブッドを敷いてくれたり、こうやってオレンジを剥いてくれたり」

「別に、普通だろう」

「それに——こうやって、お休みの日に付き合ってくれたり」

リヴァイの返事を待たずに、エイミーは続けた。

「だってお忙しいでしょ？ 兵長とデートしたい女の子にいちいち付き合っていたら、お休みが全部潰れちゃう」

約束をした日から、エイミーは不思議に思っていた。憲兵団や駐屯兵団よりも格段に訓練の多い調査兵団は、特に休みが少なく聞いたことがある。ましてやりヴァイ兵長は幹部なのだ。きつと忙しいに違いない。

エイミーが聞くと、リヴァイは意外な回答をした。

「休みでも、あまり外に出かけたりはしない」

リヴァイは持っていたオレンジを一粒口に放り込み、確かに甘いな、と言った。

「そうなんですか？」

「ああ。洗濯やら掃除やら馬の手入れやら忙しい」

「じゃあ、今日はどうして？」

どうして今日は出かけようと思ったの？

純粹に疑問に思った。たまには出かけた方がいい気分だったのだろうか。

エイミーはリヴァイの顔を覗き込むようにして聞いた。

すると、リヴァイは躊躇いなく言った。

「かわいいと思ったからだ」

「え？」

聞き返す。リヴァイ兵長は何も言わず、視線を合わせたまま頷いた。

エイミーの時間が止まる。

どうしよう。心臓が爆発しそうだ。

「……リヴァイ兵長。私は」

自分の膝の上で両手を組み、握りしめる。話してもいいだろうか。「壁外調査が終わったと聞くと、あなたが店に来るんじゃないかって」息を思い切り吐き出す。「会えるんじゃないかと期待してしまっていました。もうずっと」

リヴァイはほんの少しだけ目を開き、驚いたような表情をした。

「ごめんなさい。大切な仲間が亡くなっているのに」

「……」

エイミーは続けた。

「あなたがお花を買いに来ないことが一番いいとわかっているのに」

川の向こう岸で、子どもたちがボール遊びを始めた。一人の少年が蹴ったボールが随分と遠くへ飛んでしまい、子どもたちが一斉に走り出す。相変わらず、水面はキラキラと輝いている。

リヴァイはエイミーの膝の上から彼女の左手を取り、自分の右手と指を絡めるように繋いだ。びっくりしたエイミーがリヴァイのほうを見ると、彼は照れたように視線を逸らした。

「今の時期は、黄色の花はあるのか」

「え？」

「俺はけっこう黄色が好きだ。気持ちが明るくなる」

「……」

「部屋に飾っても良いだろ。執務室は殺風景だしな」

なんと返事をしたらいいかわからずエイミーが黙っていると、彼は右手にギュッと力を込めた。温かい。

エイミーは爆発しそうな心臓を抱えたまま、ゆっくりと言葉を発した。

「……そんなことを言われたら、期待してしまいます」

「俺も兵士だ。いつ命を落とすかわからないから、何も約束はできないが——」リヴァイは、エイミーの瞳を覗き込むようにして言った。「何でもない時に花を買いに行く」

「え？」

「期待して待っていろ」

涙が溢れそうになるのを隠すように、エイミーは少しだけ上を向いた。

リヴァイ兵長はずるい人だ。兵士だから、何も約束はできないと言いながら——かわいいと言ったり、会いに行くから期待しろと言ったり。

けれども——エイミーにとっては充分すぎるほどだった。キラキラとした透明の花瓶と、繋いだ手の温かき、そして今日という日の記憶があれば、この先もずっと生きていけると思った。いつか、リヴァイ兵長が花を買いに来なくなっても。

「じゃあ……」声が震えないように、エイミーはゆっくりと話した。

「期待して待っていますね」

「ああ」

「絶対ですよ。夜まで店を開けて待ってますから」

「怖いこと言うな」

「今だったらフリージアが素敵ですよ」

「フリージア？ 聞いたことねえな」

「はい、黄色いフリージア。きつとお部屋が明るくなると思います！」そう言うのと、リヴァイ兵長はフツと笑った。

「そうだな。教えてくれ」

五年後、八四六年

団長室で幹部の簡単な会議が行われたのち、エルヴィンはリヴァイだけを部屋に残した。

「リヴァイ。お前に手紙が来ていたぞ」

「俺にか？」

リヴァイは、エルヴィンに手渡された一枚のハガキを受け取ると、差出人を確認した。

「知り合いか？ 何やらめでたい報告らしいが」

「見たのか」

リヴァイは鋭い目つきでエルヴィン・スミスを睨んだ。

「怒るなって。宛先を確認したときに、目に入っただけだ」

エルヴィンが笑いながら弁護をする、リヴァイはそれ以上追求せずハガキの文章に視線を走らせる。

そこには完結な文章で、結婚の報告が書かれていた。エイミー・アーレント。その横には、彼女がよく話していた幼馴染の名前。

「……前の兵団本部の近くにあった、花屋の娘だ」

エルヴィンは少し驚いたような顔をした。リヴァイと花屋があまり結びつかなかったらしい。

「よく行っていたのか？」

「たまに供花を作ってもらった。本部が引っ越してからは行っていない」

「そうか」

リヴァイは、独り言のように言葉を続けた。

「元氣そうで良かった」

八四五年。ウォールマリアの壁が破られ、調査兵団はこれまで以上に壁外調査の拠点づくりに苦戦していた。

翌年に団長となったエルヴィン・スミスは、長距離索敵陣形を考案し、壁外調査での生存率を大幅に上げた。それでも——戦いの精度がどんなに上がっても、毎回多くの仲間を吊うこととなる。

リヴァイは変わらず、吊問の際に花を持っていく習慣を続けていた。

どこかで花を買うたび、彼女と過ごしたほんの少しの穏やかな時間思い出した。

Fin.